

鴻

koh

月刊俳句誌

令和5年3月1日発行

(毎月1日発行)

第18巻第3号 通巻201号

3

月号

2023



眠る山眠らぬ山も指呼のうち

訃が一つ冬かげろふの立つ岬

練兵場跡にふはりと雪螢

討入の日なり両国橋に雨

糶終へし男の囲む磯焚火

諸雑炊喰うべ無頼派にはなれぬ

筆硯洗うて年の改まる

妻の名を太箸に書き陰膳に

独楽の紐きりりと虚子と碧梧桐

飛鳥路をふと一碗の粥柱

たまさかの千枚漬と鯛茶漬

言問の雨情の詩碑に霜の花

手を揉んで冬百日の寺にゐる

冬百日

主宰作品

増成栗人

寒昂

副主宰作品

谷口摩耶

入院の日の冬雲のほぐれ初む

落葉はらはら小鳥が枝を移るたび

寒鴉の出入り多き大樹かな

二階より夫に手を振り日脚伸ぶ

窓際のベッド冬月眩しくて

手術後の眠れぬ夜の寒昂

あかときの影絵めきたる冬木立

目覚むれば梢を濡らす寒の雨

大寒の窓リハビリを繰り返し

降り積もる落葉を踏んで退院す

一月七日に入院して四人部屋に案内された時、心の中で驚きの声を上げてしまいました。私のお世話になるベッドは、何と明治天皇の母上が接客に使われていた「恩賜館」の隣の位置だったのです。明治時代の緑色の大きな屋根の上では初雀たちが遊んでいました。脊柱管狭窄症の手術を受けた後も、美しい冬木立の風景の中で、横になりながら、痛みを忘れるほど幸せな日々を過ごさせていただき、この幸運に感謝しています。

俳 作品抄

同人選

手のひらの枯蠟螂のぬくみかな
横尾かな
画讀書くほどを磨りけり今朝の冬
伊藤隆
富有柿を文鎮にして置手紙
守屋久江
鳥けもの落葉の褥深うして
山崎正子
ポップコーンぼぼと弾け冬の晴
神野未友紀
風花や茶屋街に灯の入るころ
藤原明美
降誕祭の硝子のツリ一月昇る
北原沙織
寄り添うて老人ふたり日向ぼこ
田部富仁子
北国の雪に触れたる手紙来る
足立枝里
小春日やふうはり包むオムライス
北城美佐
開戦日不意に鳴り出すオルゴール
佐藤あさ子

増成栗人 選

会員選

末枯れの野に来て遊べ尉鷄
伊藤真代
半僧坊の紅葉は色を尽くしけり
田邑利宏
夜神楽の大蛇の役は泣き上戸
守屋吉郎
冬すみれ本の余白に父の文字
青木まゆみ

黙考の指は蜜柑を剥いてをり
三浦信行
湯の町の外湯めぐりの湯冷めかな
針谷忠郎
冬深し白濁の湯に身を沈め
綾戸五十枝
しばらくは母の悴む手を撫でて
鈴木容子
今年また凛と生きたし初日の出
伊藤寛

谷口摩耶 選

吟

行メモリー

平林寺界限

祐森司



1 仁王門への道すがら一際燃える紅葉



2 仁王門

十二月一日、新座市野火止の平林寺。

曇天の今にも降り出しそうな寒さの中、平林寺門前は紅葉狩りの観光客で大混雑。いつもはこんなことはないそうで、寺の方が首を傾げるほどの賑わい、思わず引いてしまいました。

野火止は一般に「野火止水」で知られているけれども、実はその水路は防火のためのものではなく、単なる生活用水路だったものが、結果として防火の役割を果たしたのだそうで、水路の発展はかなり後世の事柄なのだそうだ。では、何をもって野火止と名称されるようになったかと言えば、古来この辺りは焼き畑が盛んで、その火勢と延焼を見張るために多くの塚が築かれ、これを「野火止塚」と呼んでいたのだそう。

これが野火止の名称の由来で、野火止塚は平林寺内に現存する。さらに言うなら、野火止は「野火留」とも称され、新座市の場合（のびとめ）と発声し濁らないのが本来だそうである。

寺の中は、さぞや混雑を極めているだろうと思っていたのだが、

これほどの人員を容れながら広い境内は静謐そのもの、禅林とは恐るべきところだと感に入ってしまった。料金五百円なりを支払い、門に入ると石畳となり、すでに森閑たるものの気配。樹木は終わり掛けの紅葉ではあったが、風の音が聞けるようであった。

金鳳山平林禅寺の冬構

主宰

これよりは禅域なるぞ初時雨

利宏

我々は、主宰、桂子、つぐみ、明子、利宏、森司の六名。仁王門への道すがら一際燃える紅葉があった。（写真1）

「京都の紅葉も素晴らしいが、この紅葉はそれに劣らない」と桂子の言葉に、明子、利宏は大きく頷く。残念ながら筆者は京都の紅葉を知らず、こんな紅葉ばかりがあるのなら、一度京都に行かなければと意を新しくしたのであった。

嵯峨野路もかくなりたるか散紅葉 明子

墓域を抜けて、平林寺自然林へ曲がると「野火止塚」が円墳のように置かれている。まさに時間のモノユメントである。

野火止塚榎落葉の吹溜まり

桂子

自然林の道は武蔵野の面影を残して落葉が厚く、裸木となるものは裸木に、そうでないものは見残しの紅葉、黄葉で装いを競っている。印象的なのは、朴ノ木の落葉がごとごとく裏返っていたので、いちめん白く、霜を抱いているように見えたことである。

朴落葉白々と地を埋めあたる

明子

雑木林一幹づつの霜湿り

主宰

雑木林は、深い物思いのなかにあつて、淡い黄色の小ぶりの蝶が散々に飛翔していた。

野火止の雑木林の冬の蝶

森司

やや細い黄落の道を進むと、突然に視界が広がる。松平家の墓域である。この松平家は、松平伊豆守を祖としており、彼が総指揮をとった島原の乱での戦没者のための供養塔が有名である。（写真4）

墓域は広く、数代の当がゆつたりと祀られていた。

禅寺の池の漣冬紅葉

つぐみ

仁王門（写真2）で各自自由行動。順路としては左回りとなっていて、仁王門より半僧坊（写真3）を経て、松平家墓所、野火止塚と自然林のコースとなる。その途中に、清例な水を深く湛えた施餓鬼池があった。

森羅万象を映すのではないかと思われるほどの冬の水には、錦鯉が泳ぎ、折からの紅葉が千々に浮かんでいた。

3 半蔵坊



4 島原の乱での戦没者のための供養塔

静かな時間であった。それだけに、もう少しゆとりのある時間での散策をしたかったという思いがしきりである。いつもそうなのだが、もう少し時間が欲しいというのが本音である。

「横浜④・横濱を知る人ならじ」 鈴木 崇

「よこはま吉田新田暗渠マップ夢ぬぐい」が手元にある。

江戸時代に入り海を埋め立てて造られた吉田新田周辺の暗渠や市民酒場などの町情報をプリントした手ぬぐい。なんともニツチな、と思うが、星羊社という横浜の地域情報誌『はま太郎』を発行する出版社で作成されたもの。まさに吉田新田のど真ん中・野毛で直販店をやっているの、そこで手に入れた。

吉田新田は、吉田勳兵衛が新田開発を計画し、埋め立てたエリアである。明暦二(1656)年に工事を開始、しかし翌年の大雨で堤が崩れて苦労は水泡に帰した。改めて計画を練り直し、万治二(1659)年に工事を再開し、寛文七(1667)年八年の歳月と八〇三八両の工費とをもつて完成した。当初は「野毛新田」と名付けられていた。

京急田ノ出町駅を降りて長者橋を渡り、道を一本入った場所に吉田勳兵衛が掘った大井戸が残る。向かいには勳兵衛住居跡で、清正公堂が建っている。

の歌が引用されていた。

思はずも横濱を知る人ならじ

万治の春に下しつる鎌

明暦に鎌初めをこそなされけれ

海を大地の用に足るべく 晶子

鉄幹の歌は、万治二年春恵に開始された吉田新田の畝入れの事を思わなければ横浜を知る人ではない、と歌い、晶子の歌は、明暦二年に始まる吉田新田の開発によって入り海が大地へと変貌したことを称賛する。二首とも新田の歴史を伝える歌である。

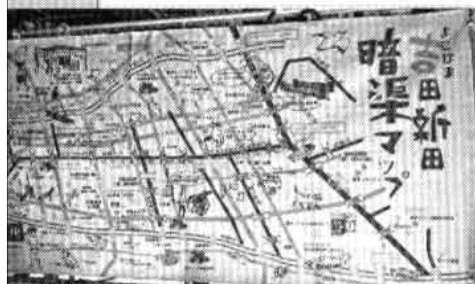
清正公は開運の神様ということで、勝馬祈願などもやっており、JRAに集まる野毛の競馬ファンにも親しまれている場所だ。

新田の先端に当たる吉野町に日枝神社があり、新田の鎮守として寛文十三(1673)年に創建された。江戸の山王権現を勧講したもので、「お三の宮」の愛称がある。新田に関心を持たなかったら、詣でることがなかった神社かもしれない。横濱駅周辺の帷子川下流地帯に、江戸時代の最後に開かれたのが平沼新田。代々平沼九兵衛を名乗る家系の五代目九兵衛が天

票庵閑話



http://www.haisi.com/koh/index.htm



吉田新田暗渠マップ手ぬぐい

保十(1839)年に着手し、七代目九兵衛のときに完成した。新田の守護神として五代目九兵衛が創建した平沼神社が相鉄線平沼橋駅近くにある。この神社では正月五日に「湯立花神事」を行っている。神主が大釜の熱湯に浸した笹葉を持って参詣人の頭上に放撒する、この湯を浴びた者はその年無病息災とされるいわれがある。笹を煮出した湯を「笹の葉茶」として神事の後に振舞ってくれる。ほっと休まる素朴な味がした。横浜の歴史の参考資料には、古本屋で見つけた横浜市立中学生用副読本「わかるヨコハマ」を主に使っている。中学生向けとはいえ、充実した内容のスケジュールだ。

羽音集

谷口摩耶 選



老木は根を逞しく冬に入る

豊川 三浦信行

黙考の指は蜜柑を剥いてをり
内庭に山鳩一羽小六月
箒目ののこる庭面に落葉舞ふ
鳥鳴くたびに暮れゆく冬木立
落葉踏む人の波から音の波
湯の町の外湯めぐりの湯冷めかな
冬晴や茶柱立ちて遠出せり
茶の花や旧家の並ぶ中仙道
同窓の友と邂逅新酒酌む

松戸 針谷忠郎

黒猫と同じ冬日を浴びてをり
来しかたを思ふ日のあり冬葦
落葉降る陸軍校舎正門に
冬深し白濁の湯に身を沈め
初時雨うすむらさきの傘開く
歯ごたへのあり赤蕪の甘酢漬
やはらかき冬の日差しよ花時計
しばらくは母の悴む手を撫でて
ラジオよりユーミン卓の冬薔薇
濡縁にもう動かざる冬の蜂
花落ちて妖しきまでの寒椿
木守柿二つ並んで映ゆる赤
冬最中病の種は尽きぬほど
梅早し歩み寄りたる影法師
今年また凜と生きたし初日の出
西に雷東に尺玉上がりけり
勉強のどこ吹く風か夏休み
子の寢息聞いて一人の生ビール
夏空にキャッチャーフライの高々と
田水沸く棚田を眺む爺と婆

松戸 綾戸五十枝

豊橋 鈴木容子

習志野 伊藤 寛

俳誌のサロン

玻璃越しの空まで磨く年の暮
十二月暦の歪み正しけり
寄鍋の締めは鯢鮓と考の謡
湯豆腐やぼろりと洩す胸の内
熱々の冬至南瓜を病む友へ
降誕祭小さき蜘蛛に日の当たる
夕焼がパノラマとなり富士に雪
真青なる冬空となりピラカンサ
古文書を習ふひととき神の留守
句作りを妻と語りて冬銀河
読み掛けの宮沢賢治葛湯とく
とんとんと雪ポストまで五分ほど
ジャコメッティの彫刻のごと枯蓮
朝刊の星占ひや蜜柑むく
柚子味噌やメーテルリンク読み返す
手作りの聖樹松笠たんと付け
残る柿お揃ひの雪帽子かな
紅白の鉢花届く目出度さよ
初雪にして除雪車の出番とは
天と地の境なく雪降りつづく

船橋 菊池ひろ子

流山 江部 博

習志野 野村昌代

喜多方 福地タカ

吹抜けの玻璃鮮やかにオリオン座
病院の待合室の聖樹の灯
着ぶくれて朝餉仕度の袖まくり
まつ先に商店街のクリスマス
罐ドロップ振りて何色冬夕焼
晴着の子四人並べてはいチーズ
いつも来る賀状の無きが気になつて
詣来て紅葉越しの房の空
煤逃げの友とメールの打合わせ
筑波嶺を遙かに仰ぐ鋏始
幕張の野外ステージ月昇る
幕張の棕櫚さはさはと秋の夕
利根運河の上を動かぬ罌雲
鬼怒川の溪谷の道紅葉どき
白猫のぐんと背伸びよ空高し
人を待つ手首をファーであたためて
籠に蜜柑あとかたづけの台所
古書店をまたはしごして十二月
みな枯れて植木鉢のみ残りけり
濡れ落葉ビニール傘を飾るなり

柏 高橋 詩

流山 中内敏夫

流山 長沢ひろり

名古屋 後藤美帆

俳誌のサロン